幼児の叩く活動に関する研究
―表現を引き出す活動の流れと方法―

横　井　志　保

はじめに

どの保育室からも歌声が聞こえない日はないであろう。ほとんどの園で行事に器楽合奏が行われているにもかかわらず、幼児の音楽的な表現活動において、器楽は日常の保育になかなか定着しない。しかし歌と違い‘楽器’という特別なモノを使用し、一定の練習をしないと音楽になりにくい性質を持つ器楽はいつまで経っても特別扱いである。そこで、筆者は身近にあるモノ[註1)]を使って音を出し、子どもと音楽する試みを行ってきた。[1)2)]

梅澤[3)]は、叩く活動は、幼児にとって教義の音楽的リズムフレーズづくりと同時に身体運動のリズムを感じる表現であり、叩くことによって引き出される身体感覚の経験であると述べている。そこで、保育者が叩く活動を行う時、梅澤が言う叩く活動の条件を満たし、かつ子どもが自分らしさを表現できる活動の流れや方法について明らかにすることが本論の目的である。

方法

（1）実践日時

2009年11月17・19日　午前10時より１グループ約30～40分間ずつ。

（2）対象

愛知県刈谷市立Ｉ幼稚園年長 にじ組29名。

（3）実践の概要

クラス担任に、あらかじめクラスを落ち着いて活動ができる人数14・15名の２グループに分けておいていただき、遊戯室にて行った。一人１つずつオケ太鼓を用意し、およそ10種類程度の打つ活動を行った。あらかじめ内容は決めてあったが、子どもの様子や状況に応じて変更したり、新たに加えたりした。実践者がモデルを示し、進めた。実践は筆者の他、共同研究者１名がグループ毎に行った。

使用した楽器は、カホン、ジャンベ、音具＝ダンボール箱、木の箱、オケ太鼓、プラスチックやスチールの円筒類（ゴミ箱）の７種類を用意した。実践の様子をビデオカメラ２台で録画した。

（4）実践の内容

実践は２日間行ったが、本論では１日目のみを対象とする。

《１日目》

遊戯室のテーブルの上に一人１つずつオケ太鼓を準備し、子どもたちは座りたい席に好きに座った。

１）音の探索

①言葉による筆者からの誘いかけ

「なんだかワクワクしてきたでしょ。ちょっと音鳴らしてみない？さぁ、右手と左手、いっぱい使って」という誘いかけで、子どもたちは自分の前にあるオケ太鼓を好きに叩いた。

②モデルによる誘いかけ

a.筆者が鍵盤楽器を弾くように指を使って音を鳴らすと、子どもたちはそれを真似て叩いた。

b.筆者がオケ太鼓の側面を叩くと、子どもたちも同じように叩いた。

２）返事の後の即興打ち

子どもたち全員で声を揃えて順に一人ずつの名前を呼んでもらい、返事をした子どもは続けて即興で叩いた。

３）リズムの模倣

筆者が叩く４呼間のリズムパターンの後、続けて子どもたちが模倣した。

子どもが叩くリズムパターンの模倣も行った。

４）曲に合わせたステップ

鈴が等間隔でいくつも付いた、リング状のロープを持ち、『畑のポルカ』の曲にのって、筆者のリードでステップした。

５）曲に合わせた即興打ち（１）

『ガランピーなカノン』[4)]のCDをかけ、筆者らと共に子どもたちもCDの曲にのって好きに叩いた。

次に、2～3人のグループでCDをかけ、順に叩いた。途中、担任の先生や筆者も加わった。

6）曲に合わせた即興打ち（2）

『クラリネットをこわしちゃった』のCDをかけ、それに合わせて好きに叩いた。

7）即興のやりとり

横長の木の箱を挟んで座り、筆者と共同研究者がリズムのやりとりを見せた後、子どもと筆者がやりとりをした。

結果と考察

実践の結果を事例を示しながら考察する。

（1）安心感が持てるということ

信頼関係がまだできていない人間関係の中、活動を行うことや、初めての活動には緊張感が伴う。安心感を持つことで、子どもは自分なりの表現をすることができる。では、どのようなことが子どもの安心感につながるのだろうか。

事例1　一斉に声を揃えて名前を呼ぶ

実験的な実践の1日目であったため、筆者と子どもたちは初対面であった。自己紹介を終え、それぞれ好きに音の探索を楽しんだ後、筆者が子どもたちに筆者の名前を呼んでもらうように頼んだ。

「みんな私の名前覚えているかな。し～ほ～さんって呼んでくれるかな。さんハイ。」子どもたちは声を揃えて「し～ほ～さん」と3拍で呼んだ。筆者も同じように「は～あ～い」と3拍で返事をすると1拍おいて、『トンットトトトン』と4拍、目の前のオケ太鼓を叩いた。一人目の子どもの名前を筆者が呼んだ後、筆者の合図で子どもたち皆で一人ずつの名前を呼び、返事をし、筆者が行ったように返事の後に続けて好きに叩いてもらった。子どもたちの名前を呼ぶ声は、その場の落ち着きをもった静かな緊張感漂う雰囲気やオケ太鼓を叩く音とは異なった、お腹の底から出ているとても大きく自信有り気な声であった。

返事の後の叩くリズムやその叩き方、音の大きさ、強さは一人ずつ違っていて個性的であった。始めの方に順番が回ってきた子どもより、だんだん後になるにつれて自信のある大きな音で叩いたり、リズムパターンになっていた。子ども達は一人を除いて、叩き終わると筆者の方を見て、終了したことを視線を投げかけて伝えてきた。

考察1

子どもたちにとって、この活動は筆者との出会い、オケ太鼓を叩く、と初めてのことばかりで緊張感を伴う活動であった。しかし、活動の始めで、普段慣れ親しんでいる友だちを、皆で一斉に呼ぶという行為は子どもたちが、とても和める活動である。返事も、その後の叩くことも、一人で行う。初めて行うことでもあり、一人だけ叩くということは、心細い思いをしながらの活動であろう。それが、その場の静かな緊張した雰囲気となって現れている。また、オケ太鼓から出る音は一人で叩くということもあってか小さな音となっている。しかし、友だちと声を揃える楽しさと安心感、慣れ親しんでいる名前を呼ぶということ、クラスの仲間の名前を知らない筆者に伝えようとすることで、だんだんと声は大きくなる。

初めての活動をする時には途中で、子どもが安心できるような内容を入れることで、その場の雰囲気は緊張がほぐれていく。

事例2　T男の模倣

筆者が始め、4呼間のリズムパターンを叩き、子どもたちは、その模倣をした。そのやりとりを何度かしていると、T男がオケ太鼓の横にあるスチールの円筒を終わりに必ず1回叩いた。その様子を見て、子どもたちが笑うので、T男に筆者の代わりに叩いてもらうことにした。すると、T男は物怖じすることなく、それまで筆者がしていた時と同じように、4呼間のまとまりのリズムを叩いた。T男は拳を使って叩いたり、指だけを使ったり、あごなども使って叩いたが、他の子

どもたちはそれを模倣した。T男は、他の子どもには与えられていなかった、たまたま横に置いてあったスチールの円筒まで使用した。しかし、子どもたちは構わず自分の前のオケ太鼓を叩いていた。A子はT男がスチールの円筒を叩いた部分は、オケ太鼓の側面を叩いて区別していた。T男は筆者が止めるまでやり続けた。

「次に、やってみたい人」と、尋ねると数人が手を挙げたが、Y子に頼んだ。Y子は、活動の始めに行った返事の後のリズム打ちでは、か弱い音でしか叩かなかったが、ここでは、とても力強く叩いて、他の子どものリーダーとなっていた。

考察 2

T男の物怖じしない性格もあったであろうが、子どもたちは、当たり前でないT男の叩き方をとても喜び、真似することを面白がっていた。筆者と行っていた時の子どもたちは一生懸命に真似しようとしていたのが、真似する相手がT男になると、次のリズム（叩き方）はどのようなものだろうか、という期待を持って、T男が叩くのを待っていた。T男という、自分たちの仲間の真似をするということで、子どもたちは一気にリラックスした。それは、次にリーダーをしたいと挙手したY子の叩き方からもわかる。それまでのY子は、恥ずかしがりながら、オケ太鼓に身を隠すかのように叩いていたが、T男に触発されたのか、とても自信を持って叩いていた。

このような活動の場合、どのようにモデルを示し、次に、どの子どもがモデルとなるかで、その後の活動の盛り上がりが決まると言えよう。

（2）音楽にノルということ

叩く活動をしている場所と同じ遊戯室の中に、円周 4 ～ 5 mほどの鈴の付いたロープが広げて置いてあった。それまで、そのロープが何をするものであるか等、子どもたちは興味を持っていなかったが、活動の中盤で、そのロープを持って、曲に合わせてステップした。

事例 3　一度のった後のノリ

筆者の誘いでロープに沿って円の中心を向いておよそ等間隔に立った子どもたちがそのロープを両手で持ち上げ、共同研究者がピアノで弾く『畑のポルカ』の曲に合わせてステップを踏んだ。曲調に合わせて、軽く駆け足したり、ゆっくり大股で歩いたり、それに合わせて手を上下に振り、鈴を鳴らした。進む方向は円周上を右に行ったり、左に行ったり、時に中心に走りこんだりした。また、その場でリズムに合わせて両手を挙げたり、下に下ろしてしゃがんだり、上下左右前後の動きを楽しんだ。

その後元の席に戻り再びオケ太鼓に向かった。『ガランピーなカノン』の曲のCDが鳴ると、子どもたちのほとんどは、自然とオケ太鼓を叩き始めた。

考察 3

活動の中盤であるということもあるが、ロープを持ってステップしたことで、子どもたちの身体はほぐれた。リズムに乗って、ロープを握った手を上下に振ることで、腕全体の力が抜けた。そして、その場で鈴を鳴らしながら軽く膝の屈伸をして拍をとったり、駆け足したり、歩いたことでも同様に全身の力が抜けたのだ。そうであるから、その後の『ガランピーなカノン』の曲が流れると、それまでの活動のように、筆者から促されなくても、自然に曲に合わせて叩きたくなったのだ。鈴を鳴らしていた時と同じように、曲に乗って脱力して叩くことができたのだ。

（3）立って叩くということ

全員が同時に好きに叩く場合は、ほとんどの子どもが事例 3 のように自然と叩き始める。しかし、少人数のグループで叩き、他の子どもは聞く側に回る場合、なかなか叩き出せず叩き始めても自分を出せないでいる。

それまで子どもたちは座って叩いていたが、最後のグループには、立って叩いても良いことを伝え、曲を流した。

事例４　叩く仲間を見ながら叩く

B男は隣のY子と顔を見合わせながら、笑顔で叩き始めた。自分の前にあるスチールの円筒だけでなく、Y子の前にある木の箱やスチールの円筒、また反対側に置いてある大きな木の箱にまで手を伸ばし、リズムにのって叩いた。Y子もB男と同じようにリズムにのり、あちらこちらに手を伸ばして叩いていた。

考察４

座って叩くと、視線の高さがちょうど他の聞いている子どもと同じになり、視界に入る。他の子どもは聴く態勢を整えてジッと演奏する子どもを見つめている。そういう緊張感から解き放たれて、立つと目の前の音具に視線を落とすことができ、集中できる。

同時に叩くような場合は、他児が見えた方が安心できるのであるが、注目されて行う場合には、できるだけ視線を感じないで活動に没入できる環境が子どもの自然な表現を引き出すと言えよう。

（４）表現できるテンポであるということ

『畑のポルカ』『ガランピーなカノン』『クラリネットをこわしちゃった』の３曲をこの実践で使用したが、『畑のポルカ』はピアノの生演奏であったため、子どもの様子に合わせてテンポはゆっくりしたり、速くしたりであった。また、『ガランピーなカノン』は、CDであったので一定なテンポではあったが、ゆるやかなテンポであった。『クラリネットをこわしちゃった』もCDで一定のテンポであったが、テンポはノリの良い軽快なテンポであった。

事例５　表現しにくいテンポ

子どもたちの好きなタイミングで叩き始めて良いことを伝えて『クラリネットをこわしちゃった』のCDを流した。曲の前奏が始まるとしばらく聴いていたが、歌が始まると叩き始めた。曲はとてもノリの良い軽快な曲で子どもたちも知っているものであったが、子どもたちは２拍ずつのまとまりを感じながら拍をとって叩いていた。

考察５

曲を流しながら叩くということは、子どもにとっては、ノリをつくりやすく、その曲のイメージから様々な発想でリズムを叩くことができるが、曲のテンポが良すぎて逆に子どもたちはノリ切れなかったようである。軽快なテンポの曲は、拍がはっきりしているので、子どもたちにとっては、拍が強調され、それに乗せられて拍をとることで精一杯になってしまうのだ。それまで好きに叩く時に流していた曲は、拍感の感じにくい曲であったためか、フレーズの中を様々なリズムで叩くことができた。ゆったりした曲の場合、子どもはしっかりと曲を聴き、感じながら自分なりの表現をすることができたのだ。

まとめ

子どもが自分の表現をすることができる活動について述べてきた。子どもが目の前にある音具を叩く様子から、一見、表現しているかのように見えるが、どれだけ心を開いて表現しているだろうか。特に初めての活動の場合、気をつけなければならないこととして、以下の４点が示唆された。

１．始めに安心感が持てる内容が含まれていること。
２．身体を解放できるようなノリをつくること。
３．演奏し合う仲間を見ながらすること。
４．拍感が強く、ノリの良すぎないテンポの曲を選択すること。

以上が、今回の実践から明らかになった。

本論では、第１回目の実践を分析の対象としたが、本児たちと行った第２回目の実践の内容や、表現された、より詳細な分析が残された課題となった。

謝辞

本研究にご協力くださった、井ヶ谷幼稚園園長先生、にじ組担任の先生、ならびに様々な表現を見せてくれた子どもたちに心から感謝申し上げます。

註および引用・参考文献

註１）ポリバケツをオケ太鼓と名付け、底の面を鼓面として使用。ラップの芯にビニールテープを巻いた物をバチとして使用したり、手で打ったりする。

１）横井志保、梅澤由紀子2001「“オケ太鼓”に向かう子どもたちの表現―実験的実践による出会い場面から―」日本保育学会大会研究論文集（54）pp.314-315

２）横井志保、梅澤由紀子2001「オケ太鼓による実験的実践における表現」愛知教育大学付属幼稚園研究紀要　第30集　pp.106-113

３）梅澤由紀子2005「幼児の表現としての“たたく”活動の教材化」愛知教育大学幼児教育研究　第14集　pp.3-10

４）ロバの音楽座　CD「ガランピーポロン」ソニーTGCS106

The Study of Beating Activity in Early Childhood
―Flow and Method to Bring Out Expression Activities―

Yokoi, Shiho*

保育室から歌はほぼ毎日聞こえてくる。しかし、器楽活動となると、多くの保育者が特別な活動と捉え、日常の保育として定着しない。そこで、筆者は身近な音具を使って器楽活動する流れや方法について実践を通し、子どもが楽しんで自分らしさを出すことのできる活動について考察した。子どもたちの叩く活動では、①始めに安心感が持てる内容が含まれていること。そして、②身体を解放できるようなノリをつくること。また、③演奏し合う仲間を見ながらすること。④拍感が強く、ノリの良すぎないテンポの曲を選択すること。以上の4点が重要であることが明らかになった。

キーワード：叩く活動，器楽，表現，ノリ，音具

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*